

小児科研修プログラム

指 導 医 上牧 勇・眞路 展彰・栗原 伸芳

<u>研 修 期 間</u>	基 本 コ ー ス	必修科目	4 週
		選択科目	4 週～3 2 週
	小児科・産婦人科コース		
	産 婦 人 科 主 科	必修科目	4 週
		選択科目	4 週～2 0 週
	小 児 科 主 科	必修科目	2 2 週
		選択科目	4 週～2 0 週

I 一般目標 (GIO)

日常遭遇する頻度の高い救急疾患を含んだ小児疾患に対する初期診療能力を身につけるために、小児の特殊性を理解した上で、小児の一般的な疾患・病態を経験し、小児の診療を適切に行うことのできる基礎的知識・技能・態度を修得する。

II 行動目標 (SBOs)

- 1) 患者、家族の有する問題を、身体的、心理的、及び社会的側面から全人的に理解した上で、患者、家族に不快感を与えない態度で接することができる。
- 2) 医師としての守秘義務を果たし、プライバシーへの配慮ができる。
- 3) チーム医療の原則を理解し、コメディカルスタッフや他科の医師などの他の医療メンバーと協調できる。
- 4) 適切な時期に、指導医、専門医へのコンサルテーションができる。
- 5) 患者の問題点を病態・生理的側面、発達・発育の側面、疫学・社会的側面から把握・整理し、問題点を解決するために必要な情報を収集・評価した上で、当該患者に対する診療方針を説明できる。
- 6) 自己評価を行い、第三者による評価を受け入れ、診療の質の向上をはかる態度を示す。
- 7) 医療に関する安全管理について理解し、院内のマニュアルに沿って、医療事故の防止と事故後の対応を行うことができる。
- 8) 小児期感染症の特殊性を踏まえた上で、院内感染及びその対策について理解し、院内のマニュアルに沿って、院内感染発生の防止と発生後の対応を行うことができる。

- 9) 院内外のカンファレンスや学術集会に参加して、症例呈示、討論を行い、適切な問題対応ができる。
- 10) 慢性疾患患者やハンディキャップを持つ患者、家族の QOL を考慮した、総合的な管理計画に参画できる。
- 11) 小児患者の病態を把握するために基本的診察法を実施し、所見を解釈できる。
- 12) 医療面接及び身体診察から得られた情報をもとに、確定診断・鑑別診断のために必要な以下の基本的検査法を実施あるいは指示し、年齢により基準値が異なる項目があることを踏まえて、結果を解釈できる。
- 13) 小児疾患の診断と治療のために必要な以下の基本的手技の適応を指導医の指導のもと決定し、単独もしくは指導のもとで実施できる。
- 14) 医療記録を指導医の指導のもとで、適切に作成し管理できる。

Ⅲ 小児科診療において経験すべき症状・病態・疾患

1 頻度の高い症状

- ① 食欲不振（哺乳力低下）
- ② 体重増加不良、体重減少
- ③ 発達の遅れ
- ④ 発熱
- ⑤ 脱水
- ⑥ 浮腫
- ⑦ 発疹、湿疹
- ⑧ 黄疸
- ⑨ チアノーゼ
- ⑩ 貧血
- ⑪ 紫斑、出血傾向
- ⑫ けいれん
- ⑬ 頭痛
- ⑭ 耳痛
- ⑮ 咽頭痛、口腔内の痛み
- ⑯ 咳嗽・痰・喘鳴
- ⑰ 呼吸困難
- ⑱ リンパ節腫脹、頸部腫瘤
- ⑲ 鼻出血
- ⑳ 便通異常（便秘、下痢、血便）
- ㉑ 腹痛

- ②嘔気、嘔吐
- ③排尿障害、夜尿、頻尿
- ④肥満、やせ

2 緊急を要する症状、病態

- ①心肺停止
- ②ショック
- ③意識障害
- ④急性呼吸不全
- ⑤急性心不全
- ⑥急性腹症
- ⑦急性消化管出血
- ⑧急性腎不全
- ⑨急性感染症
- ⑩急性中毒
- ⑪誤飲、誤嚥

3 経験が求められる疾患、病態

- (A) . . . 必ず経験すべき疾患、病態
- (B) . . . 経験することが望ましい疾患、病態
- (C) . . . 機会があれば経験する疾患、病態
- (1) 血液・造血器・リンパ網内系疾患
 - ①貧血(A)
 - ②白血病(C)
 - ③出血傾向、血小板減少症、紫斑病(C)
- (2) 神経系疾患
 - ①てんかん(A)
 - ②熱性けいれん(A)
 - ③脳炎・脳症、髄膜炎(B)
- (3) 皮膚系疾患
 - ①湿疹・皮膚炎群（乳児湿疹、おむつかぶれなど）(A)
 - ②蕁麻疹(A)
 - ③薬疹(C)
 - ④皮膚感染症（伝染性膿痂疹など）(B)
- (4) 循環器疾患

- ①先天性心疾患 (B)
- (5)呼吸器疾患
 - ①呼吸不全 (C)
 - ②呼吸器感染症 (A)
 - ③胸膜、縦隔、横隔膜疾患 (C)
- (6)消化器疾患
 - ①食道・胃・十二指腸疾患 (C)
 - ②小腸・大腸疾患 (C)
 - ③肝疾患 (C)
- (7)腎・尿路系疾患
 - ①腎不全 (C)
 - ②原発性糸球体疾患（急性腎炎、慢性腎炎、ネフローゼ症候群など） (B)
 - ③尿路感染症 (A)
 - ④泌尿器科的腎・尿路疾患 (C)
- (8)内分泌・栄養・代謝計疾患
 - ①甲状腺疾患（甲状腺機能低下症、クレチン病、バセドウ病など） (B)
 - ②副腎不全 (C)
 - ③糖代謝異常（糖尿病など） (B)
 - ④低身長、肥満 (A)
- (9)耳鼻・咽喉・口腔系疾患
 - ①中耳炎 (B)
 - ②急性・慢性副鼻腔炎 (C)
 - ③アレルギー性鼻炎 (C)
 - ④扁桃の急性・慢性炎症 (A)
- (10)精神・神経系疾患
 - ①精神運動発達遅滞、言葉の遅れ (B)
 - ②学習障害・注意力欠損障害 (B)
- (11)感染症
 - ①発疹性ウイルス感染症（麻疹、風疹、水痘、突発性発疹症、伝染性紅斑、手足口病のいずれか） (A)
 - ②その他のウイルス感染症（ムンプス、ヘルパンギーナ、インフルエンザのいずれか） (A)
 - ③感染性胃腸炎（細菌性胃腸炎、ウイルス性胃腸炎） (A)
 - ④呼吸器感染症（咽頭・扁桃炎、気管支炎、細気管支炎、肺炎） (A)
 - ⑤尿路感染症 (A)
- (12)免疫・アレルギー疾患

- ①川崎病 (A)
- ②膠原病（若年性関節リウマチ、全身性エリテマトーデス (B)
- ③小児気管支喘息 (A)
- ④アトピー性皮膚炎、蕁麻疹 (A)
- ⑤食物アレルギー (B)
- (13) 新生児・乳児疾患
 - ①低出生体重児 (A)
 - ②新生児黄疸 (A)
 - ③新生児呼吸障害 (B)
 - ④染色体異常（21 トリソミーなど） (B)

IV 方略

1 研修方法

(1) 研修医は入院患者の受持医として、病歴を聴取し、理学所見、検査所見を解釈し、診断し、治療方針を策定し、指導医とともに家族への説明を行い、治療を実施する。また週に 1 回程度の救急外来、予防接種外来、乳児健診外来で、研修期間を通じて、指導医の助言を得ながら診療にあたる。

(2) 指導医は、適切な指導を行うために、以下にあげた項目を実施する。

- ①指導医による入院患者の毎日の回診及び重要な症例についてのカンファレンス
- ②指導医による外来患者についてのカンファレンス
- ③指導医による診療録やその他の医療記録のチェック
- ④死亡例については可能な限り病理解剖を実施し、病理学的診断が行えるように努力する。

(3) 小児科診療において経験すべき症状・病態・疾患については、短期のローテイト期間中に経験できる例数には限りがあるので、代表的なものうちのいくつかを経験し、理解できれば可とする。

V 評価

評価は E P O C を使用し、自己評価及び指導医の評価を行う。